

6 まとめ

人は、日常の生活でいろいろな場所と行き来している。それほど頻繁でない行き来に於いてすら“けもの道”のような確固としたものではないながらも道が生まれる。ましてや、隣近所や水場、あるいは狩猟や採集、また、極めて幼稚ながらも可能性の考えられる栽培の場などとの頻繁な行き来に於いては、最初期段階と言える交通遺構である道が造られる。大規模な造作を伴う現在のような道路ではなくとも、遠い過去に於いては地形に素直に従った道が造られていたと考えられる。

それでは、遺跡からはどのような形で道跡が確認されているであろうか。

南九州の縄文時代早期及びそれを遡る草創期、さらには旧石器時代の遺跡においては、道は周囲よりも硬化した面として捉えられることが多い。ただ、中世や近世などのように腐植化した土が相当に踏み締められ、一部は酸化したいわゆるカナケと呼ばれる層が見られたり、幾重にも薄い層状となって検出されることはほとんどない。ただ、周囲よりも若干硬く、締まっている状態が看取されるのみであることが多い。これは、偏に当時の人口の少なさと、雨水による流水作用によるものと考えられる。つまりは人口が少ないために硬化面が発達せず、加えて硬化した面も流水により流される場合が多かったと推定されるのである。

それでは、どのような道であったのかを道跡から検出された道跡で見ると、幅が1m程度の道とそれよりも狭い30～60cm程度の道が検出されることが多い。それも、集落の生活面というよりも、地形的に緩やかに傾斜したところや、小さな迫状になった場所に見られることが多いのである。

それはなぜか。始原的な道は、やはり地形に大きく左右されたと考えられる。つまり、そこに集団として移り住む場合、麓から見て傾斜の厳しい所よりも緩傾斜の所を通過して台地なり尾根なりに上がっていったと考えるのが自然だからである。緩やかな傾斜の所こそ、台地が長い年月にわたって侵食された“水道（みずみち）”の跡である。

それを証明するように、現在でも利便性の高い交通機関を持たないミャンマーの村では、麓とは基本的にこの侵食を受けた“水道（みずみち）”を主たる道として使っている。幅1m程度の“小さい道”である。集落の中では住居間を同じ規模の道とそれよりやや広い“中位の道”が縦横無尽に走っているばかりでなく、広場に近い中心的な場所では幅が3mを越すような“大きな道”も部分的に見られる。“細い道”は、きつい傾斜の斜面をつづら折りしながら徐々に高度を上げていく極めて細い道であることから、道跡の調査で確認されることはほぼ絶望的であると言わざるを得ない。

今後、集落の調査において考えるべきことは非常に多い

と言えるであろうが、道跡の検出も集落のなかの遺構などとの位置関係の上からも、重要なことと考えられる。その際には、地形の上から、また、硬化面の追求により、そしてまた、集落内での人の行き来を考慮して綿密に調査を行なう必要があると考える。

7 おわりに

最後に、本論の展開の前にすべきこととして、“道”の定義を明確にしておくことが、そもそもの初めにあるべきではないか、という意見が聞こえて来そうなので、それについて私見を述べておく。

道跡の発掘調査で道跡と認定するか否かについて、その硬度を計測することによって、ようやく道跡と認定するという“科学的”あるいは“実証的”“論理的”な考えが広まっており、それこそが実証的な考古学の在り方だととらえる研究者や埋蔵文化財担当者が多い、もしくはほとんどだと考えられているようであるが、果たしてそうであろうか。

最初に述べたように、人が集団として生活すれば、当然道は必要であり、また、道が自然と形成されるのである。それは、けものですら“けもの道”というきわめて原始的ではあるが生活の痕跡としてそれを形づくり、残すのである。ましてや、人間は意図的に場と場をつなぐ手段、方法として道を作っていくことは必定である。

そうすれば、人が住むところには道が形成されるのは自然の摂理であり、道跡の調査において道跡が検出されるのは極めて当然のことなのである。したがって、発掘調査で道跡が検出されないというのには、次のようなことが考えられる。

- ① 調査面積が狭かったなどの理由から、ない場所だった
- ② 本来あったが、耕作などにより削平されていた
- ③ 出たはいたが、硬さが足りなかったために、道とは判断されなかった
- ④ 出たはいたが、認識不足などから見逃された

人が住めば、確実に道はできる。それ以前に、そこに住むために、雨などによって形成された“水道（みずみち）”などを利用して移動する際に、既に道として認識されている場合も、ままあったと考えられる。そこに住み始め、そこを住みかとして生活する上で、水道（みずみち）を通過して狩りに行き、採集に行くなどして、確実に道ができる。はじめは、うすばんやりした頼りない道ではあっても、人の行き来が繰り返されることによってしっかりした道となって行く。だから、道にどの程度の硬さがあるかということは、その形成過程のどの段階にあるかによって、それこそ無数のパターンがありえると考えられるのである。

道跡の調査では、“人住めば必ず道あり”との立場で道跡に立ち向かうことが必要と確信する。永劫平道跡では、道は光沢を持つと共に、おそらく火山灰の降下によるものと